



高田英子撮影

新旧ごちゃまぜの ことばかも？

清水真砂子 Shimizu Masako

エーゲ海を船で旅していた十数年前のある日のこと、甲板にいた私の耳に、ふいに美しい日本語がとびこんできた。はっとしてふり返ると、声の主は60代半ばかと見える女性で、傍らには連れらしい紳士がいた。まわりは白人だった。日本を離れて何年もたっているのだろう。すでに当の日本では聞かれなくなった少し昔の端正な日本語に私は胸を打たれていた。

留学生が時々日本人学生も使えないきっかりとして美しい日本語を口にすることがある。感心していると、次の瞬間、今度は崩れた今風の学生ことばがとび出してきて、おやおやと目を丸くしてしまう。母国に戻った卒業生と電話で話していたら、今に至るも女性ならば絶対に口にしないことばがとび出してきて、びっくりしたことがある。武田百合子は夫泰淳と竹内好とのロシア旅行記『犬が星見た』に、自分がずっとロシア語の男性ことばを使っていたことに気がついて、苦笑したことを書いている。いずれも他人事ではない。自分はどんな外国語（私の場合は英語）を話しているか。考えるたびにぞうっとしてくる。

私の英語の勉強は中学校の教科書でスタートした。田舎に育った私が英語を母語とする人に会ったのはようやく大学に入ってからである。それまでの英語の先生に英語圏に身をおいたことのある人はいなかった。そのことを残念に思う気持はないが、なにしろ読み中心の英語である。大学ではESSに入って、多少は生の英語にもふれるようになったが、内気な私はどうしても積極的にそうした場に出てゆけなかった。私は本ばかり読んでいた。英語を母語と

する人々の中に何日も、時には何ヶ月も身をさらすことになったのは、ようやく四十代も半ばになってからのことである。それだけしっかりした英語をどこで身につけたのかと初めて会う人によく聞かれるが、それはたぶん私の聞きとる力との落差に驚いてのことだろう。それに、そうなのだ。これからが肝腎なこと。

一度英国の労働者階級の出だという30代初めの女性に注意されたことがある。「そのことばは間違いとはいえないけれど、少し古い」と。そのとき、そばにいた彼女の夫の方は黙っていた。彼は今なお働かずに暮らせる名家の出で、ほれほれするような美しい英語を話す。私はといえば、彼女のことばにぎくっとして、それまで会ってきた留学生のこと、遠いヨーロッパで耳にした、日本ではもはや聞かなくなったきれいな日本語を思い出した。自分はどんな英語を書き、どんな英語を話しているのか。19世紀から21世紀までの活字になった英語を読むことに傾いてきてしまった私は、明治、大正、昭和から平成まで含めた日本語をごちゃまぜにして話すという奇妙奇天烈なことを英語でやっているのではあるまいか。気がつけば、奇天烈もまた、もはや死語に近いことばである。

しみず まさこ

1941年現北朝鮮生まれ。児童文学評論家・翻訳家。青山学院女子短期大学教授。1993年作家論集『子どもの本のまなざし』で日本児童文学者協会協会賞受賞。『ゲド戦記』全巻の訳業により2004年第41回日本翻訳文化賞受賞。最新刊に『そして、ねずみ女房は星を見た』がある。